

百田尚樹の小説と運命の女神

Notes on the Goddess Fortuna in the Novels by Hyakuta Naoki

轟 義昭

TODOROKI Yoshiaki

キーワード：異文化理解、文学と映画、フォルトゥナ、運命の女神、百田尚樹

1 はじめに

この研究に取り組もうと思ったきっかけについて話そう。2014年度から2019年度の6年間、家内と鹿児島市内の映画館によく行ったものだ。年間約30本見た¹。映画を見た後は、宣伝用パンフレット（無料）を自宅に持って帰り、見たい映画をチェックした。私が興味を抱いた映画の一つは、2019年2月15日に封切られることになる『フォルトゥナの瞳』（三木孝浩監督）のパンフレットだった²。タイトルにある「フォルトゥナ」の言葉は言うまでもなく、裏面に書かれた「“フォルトゥナ”とは運命の女神。」という文言に目が留まった。私の研究テーマが中世文学／中世ヨーロッパ写本における運命の女神だったからだ³。好奇心は掻き立てられたが、「その瞳を持ってしまった者には「死を目前にした人間が透けて見える」という不思議な力が宿る」と書かれたキャッチフレーズにはいささか腑に落ちなかったことを覚えている。実際、映画を見たとき、注目したいシーンは一瞬だったので正確な台詞までは分からなかったが、意識を失って病院に運び込まれた主人公の木山慎一郎（神木隆之介）に対して医師が「フォルトゥナというのは、ローマ神話に出てくる運命の女神」とか何とかと説明していたようだった。この映画がまさに日本におけるフォルトゥナの研究教材（問題提起）になると思った瞬間だった。「運命の女神」は中世ヨーロッパ思想・文学で頻繁に扱われ、英文学のなかではG. チョーサーやW. シェイクスピアの作品に頻出する題材である。池田光徳氏の考え方⁴に従えば、日本映画のなかで語られた「運命の女神」の概念、つまり日本文化のなかに顔を出した異文化を解釈する行為は異文化理解に結びつくことになる。

タイトルにある「フォルトゥナ」は別にして、先程のパンフレットに目を凝らすと、「原作：百田尚樹『フォルトゥナの瞳』（新潮文庫刊）」という活字があった。私は短大で「文学と映画」に焦点をあてて比較文学の観点から授業を展開しているので、映画を見た後、その原作（小説）に関心を寄せた。リンダ・ハッチオン（L. Hutcheon）のアダプテーション

1 2014年度は33本、2015年度は35本、2016年度は32本、2017年度は25本、2018年度は19本、2019年度は24本見た。合計168本となり、年平均28本見たことになる。

2 この映画は2月16日映画館（東宝シネマ）で見た。

3 例えば、1993年、三省堂からハワード・ロリン・バッチ著、黒瀬保監訳『中世文学における運命の女神』の翻訳書を共訳の形で出版した（私の担当は第1章と第5章）。また、2000年、成美堂から『中世ヨーロッパ写本における運命の女神図像集：補遺』の編著書を出版した。

4 <https://navymule9.sakura.ne.jp/020511kyose.html>を参照（2022年8月29日閲覧）。池田光徳氏は「異文化理解の基礎」のなかで次のように述べる。異文化理解とは、複数の「文化」の概念を前提にして、自分のそれ（＝文化）とは「異なる文化＝異文化」を、理解したり、解釈したりしようとする努力のことをさします。

理論に従えば、映画は原作に忠実ではない「二番目に製作された作品」⁵である。そこでテキスト（小説）を読んで映画で語られた「フォルトウナ」に関わる内容について調査したいという思いに駆られた。

研究に取りかかろうとした折、2020年8月、好酸球性多発血管炎性肉芽種症（指定難病45、通称EGPA）を発症して約1ヶ月間鹿児島大学病院に入院せざるを得なくなった。その間、何もすることがなかったので、家内が病院に届けてくれた文庫本を読んだ。東野圭吾、重松清、赤川次郎、湊かなえ、宮下奈都、百田尚樹らの小説を退院するまで計26冊読んだ。百田尚樹の長編小説『永遠の0』⁶（講談社文庫）は読むのに苦労したが、一番関心を寄せた。「運命の女神」という文言が2回も用いられていたからだ。このとき一つの考えが浮かんだ。百田氏は、2006年、『永遠の0』を公表して作家デビューした。そのとき百田氏は心の片隅に「運命の女神」への思いを抱いた。その思いを『フォルトウナの瞳』（2014年）⁷で開花させたのではないだろうかという考えである。

本稿では、百田尚樹の小説のなかに描かれた「運命の女神」に着目して、次の2点について解明したい。(ア)百田氏は運命の女神をどのような存在だと捉えていたか。(イ)百田氏は『フォルトウナの瞳』を出版するまで運命の女神への思いをずっと抱いていたかどうか。

2 研究方法

三木孝浩監督の映画『フォルトウナの瞳』については、DVD（デジタル多機能ディスク）を利用して調査する。百田尚樹の小説『フォルトウナの瞳』については、新潮文庫本（2015年）を利用して調査する。『永遠の0』から『フォルトウナの瞳』の間に出版された百田氏の小説⁸については、すべて文庫本を利用して調査する。

3.1 DVD での調査結果

映画『フォルトウナの瞳』が封切られて約半年後に発売⁹されたDVDを購入して鑑賞し、「フォルトウナ」の文言がある場面をチェックした。それは次の3つの場面に見られた。

(1)少年：うっ…ううっ…うっ…うう…（少年の荒い息）うっ…うわっ…

少女：ああ…う、うっ…

慎一郎の声：フォルトウナとは運命の女神¹⁰。

少女：助けて…

慎一郎の声：その瞳をもってしまった者は、死を目前にした人間が透けて見えるという…

5 リンダ・ハッチオン著『アダプテーションの理論』（片淵悦久・鴨川啓信・武田雅史訳、見洋書房、2012年）、p.11。

6 弁護士を目指す司法浪人の佐伯健太郎が、フリーライターの姉（慶子）から新聞社主宰の終戦60周年記念プロジェクトのアシスタントを頼まれ、特攻隊員だった実の祖父のことを調べようとする569ページの長編小説。この作品は2006年8月に太田出版より刊行され、2009年7月に講談社文庫より刊行された。

7 この作品は2014年9月新潮社より刊行され、2015年11月新潮文庫より刊行されている。私は後者を利用した。

8 『輝く夜』（講談社文庫）、『ボックス！』（上）（下）（講談社文庫）、『風のなかのマリア』（講談社文庫）、『モンスター』（幻冬舎文庫）、『影法師』（講談社文庫）、『黄金のバンナム』を破った男（PHP文芸文庫）、『锚を上げよ』（1）（2）（3）（4）（幻冬舎文庫）、『幸福な生活』（祥伝社文庫）、『プリズム』（幻冬舎文庫）、『海賊と呼ばれた男』（上）（下）（講談社文庫）、『夢を売る男』（幻冬舎文庫）。

9 2019年8月21日発売。

10 台詞中の下線及びテキストの下線は筆者による。以下同じ。

- (2)黒川：透けて見えてんだろ？あの子が。やっぱりそうか…いつから見えてる？
 木山：最近よく見るようになりました。あ、でも、本当は、もっと前から見えてたのかも…
 黒川：そうか…
 木山：先生も透けて見えるんですか？
 黒川：ああ。研修医の時、生死をさまよってからだ。透けて見えた人間が、間もなく死ぬことも、その時知った。ひょっとしてお前、誰かの運命を変えたか？1つ忠告しとく。人の運命に関わるな。
 木山：なぜですか？
 黒川：神の領域だからだよ。この目は、“フォルトゥナの瞳”だ。
 木山：フォルトゥナ？
 黒川：フォルトゥナっていうのは、ローマ神話に出てくる運命の女神のことだ。俺たちは、いわば、人の未来が見える。けどな…だからといって、勝手に他人の運命をいじれば、必ずその代償を支払うことになる。
 木山：代償…
 黒川：俺たちは神でも預言者でもない。誰かの運命に手を出すことは許されないんだ。
- (3)葵の声：フォルトゥナとは運命の女神。私はあなたと同じ“目”を持っていた。

(1)は「フォルトゥナの瞳」というタイトル文字が画面に映し出される少し前にある。飛行機事故の発生で散乱した機体の傍を（生き残った）少年が歩いているときに木山慎一郎が発する心の声である。(2)は慎一郎が職場（自動車のコーティング工場）の遠藤社長の運命を変えたことが原因で、胸の痛みから気を失って日野倉総合病院に運ばれたときに黒川医師に忠告される台詞である。(3)は恋人の慎一郎が死んだ後、公園で遊ぶ園児たちの声を聞きながら桐生葵が発した心の声である。

映画では黒川医師の説明だけではなかった。オープニング場面でもエンディング場面でも「フォルトゥナとは運命の女神」という台詞が語られていた。その文言の配置は、タイトルとストーリーのかかわりを映画鑑賞者の心に深く印象付けようとした三木監督の趣向と言ってもよいだろう。

3.2 映画に基づいた原作の調査結果

「フォルトゥナ」の文言が語られた映画の場면을念頭に置いてテキストを読み進めると、その文言は次の2つの場面に見られた。

- (4) 「縁もゆかりもないパティシエの命など救って自分が死ぬくらい、下らないことはない」その言葉に素直に頷くことはできなかったが、一方で黒川の言うとおりかもしれないとも思った。「神の領域」に踏み込まないことが正しいかどうかはわからなかったが、自分の命が削られるとなると話は別だ。
 「僕たちは言うなれば、フォルトゥナの瞳を持っているんだ」
 「フォルトゥナってなんですか」
 「ローマ神話に出てくる球に乗った運命の女神だ。人間の運命が見える」

慎一郎が頷くと、黒川は続けた。

「しかし、女神には必要かもしれんが、僕たち人間にはまったく役に立たない無意味な能力だ。例えてみれば、人間がエラを持ったようなもんだな。無理に使えば死んでしまうだけだ」(p.258)¹¹

- (5) 今更ながら、自分の「力」を恨みなくなった。他人の「死の運命」を見ることが出来る「目」など、一度も望んだことはない。黒川は「フォルトウナの瞳」と呼んでいたが、こんなものがいったい何の役に立つのか。(p.421)

慎一郎が黒川医師と最初に出会うのは、駅で「あの男が透けて見えているんじゃないのか」(p.173)と声をかけられたときだった。その後、彼は横浜の総合病院のホームページで黒川武雄という名前の医師がいることを見つけて電話する(p.239)。(4)は横浜駅近くの喫茶店で再会した際に、黒川医師によってフォルトウナについて語られる台詞である。(5)は慎一郎が会社に戻ってプジョーの車を磨いているときに黒川医師の言葉を思い出して発した心の声である。では、映画に見られたオープニング場面とエンディング場面はどうなっているか。プロローグ(pp.5-9)では慎一郎が電車に乗っていると、乗客(男性)の手が「透き通って」いることに気付く疑問を感じることを示される。映画のような「フォルトウナの瞳」の文言は見られないが、これから始まる物語の問題提起がされている。エピローグ(pp.485-487)では葵が慎一郎と同じ「目」を持っていたことが示される。「この日が来ることも知っていた。なぜなら、慎一郎は自分と同じ「目」を持っていたからだ。彼は事故を防ぐために自らを犠牲にしたのだ。」(p.485)。だが、「フォルトウナ」の文言は見られない。

原作では人の手が透けて見ると、慎一郎は行動を起こさずにはいられない。映画とは異なり、桐生葵の命(p.215)と金田の襲撃から遠藤社長の命(p.148)を救うほかに、タクシーの運転手の命(p.61)と公園で遊んでいる男の子の命(p.127)も救っている。もちろん、人の運命を変えるたびに、必ず彼は胸の痛みに襲われている。「フォルトウナの瞳」という文言の初例は映画とは違い、黒川医師との2回目の出会いのとき(p.258)だった。これは物語が半分すぎたところになる。言い方を変えると、原作では慎一郎には「運命を変える力」と「死」を消し去る力があることが示されるが、それがタイトルの「フォルトウナの瞳」とどのように結びつくのか、物語のオープニングから中ほどになるまでは分からない。物語の後半で再度慎一郎が黒川医師の言葉を思い出して「フォルトウナの瞳」の文言を発している(p.421)ので、映画ほどではないが、タイトルとストーリーの結びつきは読者の記憶に残ると思われる。

3.3 原作の調査結果

映画では語られない「運命の女神」にまつわる興味深いことが小説のなかで描写されていた。それは「運命の車輪」のことだ。

- (6) 慎一郎は心の中で唸った。結果的には自分が遠藤の運命を変えてしまった。あの時、

11 本文中のページ数は百田尚樹『フォルトウナの瞳』（新潮文庫）のテキストに基づく。以下同じ。

もしも遠藤が金田を叱っているのを見ていなければ、金田が自分にコンパウンドの容器を投げ付けることもなかった。それなら、金田はおとなしくクビになっていただろうし、遠藤も金田を殴らなかつただろう。彼の運命が変わることもなかったはずだ。

しかし自分が遠藤の運命の車輪の向きを変える石になってしまった。だから、もう一度遠藤の運命を変えなくてはならない。(pp.142-143)

- (7) もし、街で透明な人間を見つけたら、その人の運命の車輪に少しばかりの「力」を加えてやりたいとさえ思うようになっていた。自分にはその力がある。行く手に「死」が待っている動く車輪に小石ほどの力が加わるだけで、車輪の進行は大きく変化することになる。そしてそれが「死」を回避することになるかもしれないのだ。(p.167)

(6) は慎一郎自らが遠藤社長の運命を変えたことを嘆いて、再び社長の運命を変える決意を吐露しているところである。ここで運命の女神の象徴性豊かな持ち物、即ち人間の運命を左右する「運命の車輪」は人の手で操作できるかのように百田氏は論じている。(7)でも百田氏は「運命の車輪」に「力」を加えて車輪の進行を変えることで人の「死」は回避できるとの発想を展開している。百田氏の「運命の車輪」の用い方はとても興味深い。

3.4 百田氏の小説の調査結果

調査対象は『永遠の0』から『フォルトゥナの瞳』までの小説である。ここでは3.2と3.3で分析した『フォルトゥナの瞳』を除く12作品を調査した。それぞれのテキストを読むと、8作品の中で「運命の女神」あるいはそれに類する文言を見出せた。

- (8) 「もし、宮部さんが飛行機を換えてくれと言わなければ、助かっていたのは宮部さんだったかもしれません」

「そんな！」

と、姉が悲鳴のような声を上げた。

「これが運命でしょうかね。宮部さんは最後に運命の女神に見放されたのですよ」

「ひどい！」と姉が叫んだ。(『永遠の0』, p.528)

- (9) 祖父はぼくの目を睨むようにして言った。

「宮部さんは五二型に乗り込んだ時、エンジンの不調を見抜いたんだと思う。その時、あの人は自分が生き残りのクジを手にしたことを覚ったのだー」

ぼくは心の中で、声にならない声を上げた。運命の女神は土壇場で宮部に何という残酷な選択を与えたのか。(『永遠の0』, p.546)

- (10) 「マリア姉さんー」背後から妹のフローラが声をかけた「私も戦いに参加したい」

「あなたは戦いに加わってはだめ」

「どうして」

「あなたのお腹にはオスパチの卵が育ってる」

「私はワーカーとして生まれたのよ。戦士として戦いたい」

マリアはフローラの勇気と闘志に溢れた顔を見て、運命の女神がなぜフローラを選んだのかかわったような気がした。(『風の中のマリア』, pp.242-243)

- (11) 離婚した翌月、探偵社から、高木英介がアメリカから帰国し、本社に戻ったという

報告を受けた。

これは運命だと思った。

英介は、まるで私が離婚するのを待っていたかのように日本に戻って来た一私にはそうとしか思えなかった。運命の女神が二人を引き寄せている。私の狂気が芽生えたのはこの時からだ。（『モンスター』, p.388）

- (12) しかし今あらためて白井の半生を追った時、そこには運命の女神がいたのだとしか思えない。引退を考えていた25歳の無名のボクサーをたまたま見つけたカーン博士。
（『黄金のバンタム』を破った男』, p.28）

- (13) しかし幸運の女神が微笑んだだけで世界チャンピオンになれるほど、この世界は甘いものではない。そのチャンスを引き寄せたのは白井自身だ。
（『黄金のバンタム』を破った男』, p.29）

- (14) この3つの重要な試合で、1つでも拙い試合をしていたら、白井の栄光はなかっただろう。白井は運命の女神が与えた3つの試練をすべて自らの力で乗り越えたのだ。
（『黄金のバンタム』を破った男』, p.29）

- (15) ボクシングを長く見ていると、「運命」というものがあるような気がしてならない。2つの拳がコンマ何秒の間に何度も交錯する—その瞬間、実は「運命」も激しく交錯しているのだ。「運命の女神」さえどちらに微笑もうか迷うような試合において、勝利を掴むボクサーは実力以外の「何か」に支えられている。
（『黄金のバンタム』を破った男』, pp.206-207）

- (16) 原田の3階級制覇のチャンスは失われたかに思えたが、運命の女神は原田を見捨てなかった。（『黄金のバンタム』を破った男』, p.301）

- (17) しかし幸運の女神は、絶えず心の底から望んでいる者には、時として気まぐれな振り返りを見せる瞬間がある。10月の最後の日曜日、アルバイトの昼休みに桜橋の交差点で買い物帰りの西村美美とばったり出会った時、ほくがそう考えたとしても不思議ではないだろう。（『錨を上げよ』〈一〉, p.241）

- (18) しまった！ と思った時には、もはや言葉はすっかり口から出てしまった後だった。こんなところで他人と自分を比べる台詞なんか吐くもんじゃない。しかもよりによって森山の名前を出すとは。穴でもあったら入りたい気持ちだった。幸運の女神にもそっぽを向かれてしまった。（『錨を上げよ』〈一〉, p.242）

- (19) 単調な日々が流れるように過ぎて行った。何の事件も起こらなかった。まるでほくの人生から何かが去ってしまったみたいだった。これまで散々ほくを振り廻してきた気まぐれな運命の女神もからかうのに飽きたのかもしれない。
（『錨を上げよ』〈四〉, pp.282-283）

- (20) 一あの時、微笑みを返さなかったら、と思いつつたびにぞっとした。「チャンスは前髪を掴め」という諺がある。たしか「幸運の女神」というのは後頭部は禿げていて、通り過ぎた時に捕まえようと思っても既に遅いという意味だ。

（『幸福な生活』, p.80）

- (21) 同時に悔しさを覚えた。かつて上海にいくつもの巨大タンクを持っていた国岡商店が、今、国内に小さなタンクすら持っていないということに理不尽なものを感じた。あれほど国家のために尽くしてきた国岡商店に、運命の女神は何という過酷な扱いを

するの。 (『海賊と呼ばれた男』(下), p.27)

- (22) 最新式の機械で鐵造の目を診察した桑原は、これまでの多くの医者と同じように、手術は不可能と判断した。鐵造はさすがに落胆した。自分はもう一生、仙厓の飄逸な筆を見ることも、唐津焼の渋みのある色彩を見ることも、古今の名画を見ることも叶わないのか。しかしこれはもう運命として受け入れるしか仕方がないと諦めた。

ところが運命の女神が鐵造に微笑んだ。 (『海賊と呼ばれた男』(下), p.413)

- (23) 「いや、オーバーじゃないね。『チャンスは前髪を掴め』って諺を知ってるか。チャンスの神様というのは、前だけ髪の毛があって後ろはつるっぱげなんだ。一度通り過ぎてから、掴まえようと思っても、もう遅い。出版に際して、俺は自分に質問したんだ。…」 (『夢を売る男』, p.78)

(8)(9)は『永遠の0』からの用例で、広島と長崎に新型爆弾が投下された8月、つまり終戦間際に、宮部久蔵少尉が出撃命令を受けた場面にある。「生きて家族の元に帰ること」

(p.286)が第一と考えていた宮部だったが、特攻出撃で自らが乗る零戦五二型のエンジンが不調であることを見抜くと、何故か予備士官の大西が乗る二一型機と交換し軍人らしい最期を遂げた。ここで百田氏は「運命の女神」という文言を用いて、宮部の不幸は「運命の女神」の仕業によるものだと決めつけるような書き方をしている。(10)は『風の中のマリア』からの用例で、オオスズメバチのマリアたちが幼虫たちのために「より大量の食糧が必要」(p.239)との判断からキイロスズメバチの襲撃を決断した場面にある。擬女王バチになるフローラがその「戦い」に加わろうと勇氣と闘志を示したことに對し、百田氏は「運命の女神は勇者に味方する」(Fortune favors the brave)という諺を彷彿させるような表現でマリアの思いを描写している。(11)は『モンスター』からの用例である。幼い頃「バケモン」「ブス」と呼ばれたが、東京で何度も整形手術を施して美貌を手に入れると、故郷の田舎に戻ってレストランを開いた田淵和子(主人公)[祖母の養子となったのちは、鈴原未帆(p.109)]は、高校のときに淡い恋心を抱いた同級生高木英介への「想い」

(p.300)が募り、探偵を雇って彼の調査を依頼し報告させていた。ついに彼がアメリカから帰国するという報告を鈴原は受けた。百田氏は鈴原の離婚と高木の帰国のタイミングのよさを人知の及ばない出来事と考え、「運命の女神」の計らいだと決めつけるような書き方をしている。(12)(14)(15)(16)は『「黄金のバンタム」を破った男』からの引用である。1948(昭和23)年、25歳になったボクサー白井義男は限界を感じて引退を考え始めた時だったが、アメリカ人のカーン博士の指導のもとで「フットワークを駆使した科学的なボクシング」(p.18)スタイルで息を吹き返した。また、サムーノ瀬が与えてくれた大きなチャンスのおかげで、彼は世界フライ級王者ダド・マリノに挑むことができた。一度目はノンタイトル10回戦(判定負け)、二度目はノンタイトル10回戦(7回TKO勝ち)、三度目は世界フライ級王座への挑戦(15回判定勝ち)である。29歳になった白井は3つの試合によって栄光に輝いた。日本初の世界チャンピオンになったのである。百田氏は、白井の幸運は「運命の女神」のおかげであると考え、さらに白井の3試合を「運命の女神」の試練という表現で説明している。(15)はファイティング原田が「黄金のバンタム」(p.179)と呼ばれた世界最強の男エデル・ジョフレに挑んだ世界バンタム級タイトルマッチ(1965年5月18日開催)に関する百田氏の「個人的な見解」(p.206)である。その試合は15ラウンドで決着

がつかず判定に持ち込まれ、原田が2対1の判定で勝利した。どちらが勝者となってもおかしくない状況だったことに対して百田氏は「運命の女神」という文言を用いて解説している。(16)は原田が3階級制覇をかけてジョニー・ファメションに挑んだWBCフェザー級タイトルマッチ(1969年7月28日、シドニー・スタジアムで開催)についてである。原田はチャンピオンから3度のダウン(2R, 11R, 14R)を奪ったが、レフリー(ペップ)が下した「引き分け」の判定により3階級制覇は実現しなかった。ところが、WBCはこの試合の「スキャンダラスな判定」(p.302)を問題視し、ファメション陣営に半年以内に原田との再戦を通告した。百田氏はこの状況に対して「運命の女神」の文言を用いて説明している。(19)は『錨を上げよ』からの用例である。作田又三(主人公)は何らかの出来事や事件に巻き込まれた生活—東京のレコード店での生活、北海道でのウニ密漁生活、大阪での保子との結婚生活及び放送作家としての生活、さらに保子と離婚後のバンコクでの生活—をしていたが、大阪に戻ってからのスーパーの定員生活は「単調な日々」だった。百田氏は作田の人生について「運命の女神」という表現を用いて説明している。(21)(22)は『海賊と呼ばれた男』からの用例である。前者は「第三章 白秋」(昭和22年~昭和28年)の場面にある。鐵造は「元売会社」になれば海外から石油を買い付けて石油を販売できることを喜ぶ。だが、「元売会社」になる第一条件は「石油タンクを有するもの」とあった。国岡商店は、戦前、中国の上海に巨大タンクを保有していたが現時点では国内に小さなタンクさえない。この状況変化を「運命の女神」の仕業だと考えての表現である。後者は「第四章 玄冬」(昭和28年~昭和49年)の場面にある。鐵造は80歳を過ぎてから「黒色白内障」を患う。眼科の名医桑原泰治教授(慶応大学病院)でさえ手術は不可能と判断した。鐵造は諦めていたが、事態が好転する。その説明に「運命の女神」の表現が用いられている。

「運命の女神」に類する文言がある。(13)は『「黄金のバンナム」を破った男』からの引用である。2人のアメリカ人(カーン博士とサマーノ瀬)は25歳で引退を考えた白井義男のボクサー人生を好転させた。百田氏はこのことを「幸運の女神」の微笑みという譬えを用いて説明している。(17)(18)は『錨を上げよ』の用例である。前者は主人公の作田又三が好きな女性(西村美美)とばったり交差点で出会った場面である。百田氏はこの出来事を「幸運の女神」の計らいのように考えた書き方をしている。後者は作田が西村を喫茶店に誘ってからの会話の一部である。作田は自らの立場を明確にしようと他者(森山)と比較したことで彼女との間で気まずい雰囲気になってしまった。この状況に対して百田氏は「幸運の女神」を用いて解説している。(20)は『幸福な生活』の用例で、「残りもの」という短編のなかにある。10回目の見合いに失敗した37歳の女性は雨のなかを急いで歩いていたとき、「よかったら、入りませんか」(p.80)と後ろから声をかけてきた背の高い男性に微笑み返してしまう。このことがきっかけで二人はめでたくゴールインした。百田氏はこの状況を後頭部が禿げた「幸運の女神」の譬えを用いて解説している。(23)は『夢を売る男』の用例で、「チャンスを掴む男」にある。丸栄社の編集部長(牛河原勘治)は巧妙な話術で「ジョイント・プレスというシステム」(p.28)を提案して自費出版したい人たちの心を掴む。温井雄太郎も心をつかまれたひとりで、友人の忠告にも耳を傾けない。雄太郎は自らの行為、つまり小説を自費出版することの正当性を訴えるために前だけ髪の毛がある「チャンスの神様」を持ち出している。

以上、調査結果をまとめると表のとおりである。

タイトル	出版元	発行年月	記述の有無
『永遠の0』 ¹²	太田出版	2006年8月	○
『聖夜の贈り物』 ¹³	太田出版	2007年11月	×
『ボックス！』(上)(下) ¹⁴	太田出版	2008年6月	×
『風のなかの MARIA』 ¹⁵	講談社	2009年3月	○
『モンスター』 ¹⁶	幻冬舎	2010年3月	○
『影法師』 ¹⁷	講談社	2010年5月	×
『リング』 ¹⁸	PHP文芸文庫	2010年5月	○●
『錨を上げよ』(1)(2)(3)(4) ¹⁹	講談社	2010年11月	○●
『幸福な生活』 ²⁰	祥伝社	2011年6月	●
『プリズム』 ²¹	幻冬舎	2011年10月	×
『海賊と呼ばれた男』 ²² (上)(下)	講談社	2012年7月	○
『夢を売る男』 ²³	太田出版	2013年2月	▲

「運命の女神」という文言 [○印参照] は、『リング』に4例、『永遠の0』と『海賊と呼ばれた男』のなかにそれぞれ2例ずつ、『風のなかの MARIA』『モンスター』『錨を上げよ』のなかにそれぞれ1例ずつ用いられていた。それとは別に「幸運の女神」という文言 [●印参照] が『リング』、『錨を上げよ』、『幸福な生活』のなかにそれぞれ1例ずつ用いられていた。「幸運の女神」には、「運命の女神」には見られない、後頭部が禿げているという特徴があった。それは、『夢を売る男』で描写された「チャンスの神様」[▲印参照]と同じ特徴であった。

ここで私は「幸運の女神」と「チャンスの神様」を調査結果に含めた。それらは「運命の女神」と大いに関係があるからだ。その関係性については、4節の考察で論じた。

3.5 問題提起

「はじめに」で述べた目的の(イ)は3.4で達成された。つまり、百田氏はさまざまな小説のなかに「運命の女神」及びそれに類する文言を忍ばせていた。これは彼の心の片隅に彼女の存在がずっと留まっていたことの証となるだろう。残った課題は、(4)(5)(6)(7)の例文に見られた運命の女神及び運命の車輪に関する表現の裏付けをとることと、(13)(17)(18)(20)(23)の用例に見られた「幸運の女神」と「運命の女神」の関係性及び「チャンスの神様」と「運命の女神」の関係性を明確にすることである。これが目的の(ア)にあたる。

12 本書は2009年7月、講談社文庫より文庫本として刊行されている。

13 本書は2010年11月、講談社文庫より『輝く夜』(文庫本)として刊行されている。

14 本書は2013年4月、講談社文庫より文庫本として刊行されている。

15 本書は2011年7月、講談社文庫より文庫本として刊行されている。

16 本書は2012年4月、幻冬舎文庫より刊行されている。

17 本書は2012年6月、講談社文庫より文庫本として刊行されている。

18 本書は2012年11月、PHP文芸文庫より『黄金のバンナム』(文庫本)として刊行されている。

19 本書は2019年9月及び10月、幻冬舎文庫より文庫本として刊行されている。

20 本書は2013年12月、祥伝社文庫より文庫本として刊行されている。

21 本書は2014年4月、幻冬舎文庫より文庫本として刊行されている。

22 本書は2014年7月、講談社文庫より刊行されている。

23 本書は2015年5月、幻冬舎文庫より刊行されている。

- 1 運命の女神はローマ神話にでてくるのか。
- 2 運命の女神は球に乗っているのか。
- 3 「人の運命が見える」とはどういうことか。
- 4 車輪の進行は大きく変化するとはどういうことか。
- 5 行く手に「死」が待っている動く車輪とはどういうことか。
- 6 「幸運の女神」及び「チャンスの神様」は運命の女神とどのような関係か。

4 考察

ここでは上記の6つの課題について考察する。

4.1 運命の女神はローマ神話にでてくるのか

研究者の立場から言えば、J.B. カーター(1900)の論文²⁴とかH.R. パッチ(1927)の専門書²⁵をひもとけばよい。フォルトゥナが古代ローマにおいてさまざまな形態で信仰の対象として崇拝されていたことを知ることができる。Loeb版でオウィディウス(Ovid)の『祭暦』²⁶やアウグスティヌス(St. Augustine)の『神の国』²⁷のようなラテン文学を読めば、フォルトゥナ・ウィリリス(Fortuna Virilis)、フォルトゥナ・プブリカ(Fortuna Publica)、フォルトゥナ・ムリエブリス(Fortuna Muliebris)のような偶像の存在を知ることができる【資料1】。

では、研究者でない人はどうすればこの課題を証明できるのか。最も簡単な方法は、ネット検索からの情報である。このような課題はてきぱき片付けられる²⁸。しかしながら、情報の信憑性は低い。そう思って、私は本学の図書館に所蔵されたローマ神話に関する図書を調査した。数冊のめばしい図書があった。そのなかで私が注目したのは、R. ウォフ著、細井敦子訳の『ギリシア・ローマの神々』(学藝書林、2010年)だった。この図書は大英博物館双書第4期古代の神と王の小事典(全7巻)の1巻である。このなかにオリンポスの12神が含まれていることは言うまでもない。そのほかの神々は5部門に分けて紹介されていた。ブリタニカ百科事典(英語版)²⁹に示されているように、フォルトゥナはギリシア神話のテュケに対応すると考えられていたため、フォルトゥナはテュケと対で「公と私」の部門にあった。この図書の目次の分類を見るだけで課題1の証明は事足りる。

4.2 運命の女神は球に乗っているのか

(4)の用例にある球に「乗った」運命の女神という表現に対して私は疑問を抱いた。ジョージ・ウィザー(George Wither)(1635)のエンブレム集³⁰を読んでいたので。そこに

24 J.B. Carter, "The Cognomina of the Goddess 'Fortuna'," *TAPA*. xxxi, 63. 彼は41の崇拝の名称(呼び名)を集めている [内訳は銘刻だけ22, 文学だけ7, 銘刻と文学両方12]。

25 H.R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature* (1927; New York, rpt. 1967), p.15; H.R. パッチ著, 黒瀬保監訳『中世文学における運命の女神』(三省堂, 1993年), pp.14-15.

26 cf. Ovid, *Fasti*, IV. 145-150 & IV. 375-376.

27 cf. St. Augustine, *De Civitate Dei Contra Paganos*, IV. xix.

28 例えば, <https://namaejiten.net/post-197/> 参照 (2022年8月29日閲覧)。

29 *The New Encyclopedia Britannica* (15th edition, 1974), p.895: "Fortuna, in Roman religion, goddess of chance or lot who became identified with the Greek Tyche;..."

30 George Wither, *A Collection of Emblemes, 1635* (A Scholar Press Facsimile, rpt. 1973), Book 3, Illustr. XL.

は Fortune の特性を表した ‘She stands upon a Ball’ のような表現があった。‘stand’ という英単語は『ジーニアス英和辞典』、『リーダーズ英和辞典』、『プログレッシブ英和中辞典』で確認しても、「立っている」という意味であり、「乗っている」という意味はない。

では、百田氏はなぜ「乗る」という表現を用いたのだろうか。『広辞苑』(第6版)に頼ると、「乗る」には①物の上に位置を取る、②乗り物の上または内部に身を置くという意味があった。①の意味であれば、球に「乗った」運命の女神は、球上に「立っている」運命の女神と同じような意味合いであると考えられる。こうなると、「球上に立っている運命の女神の画像が古代ローマの美術においてすでに見受けられた」³¹とする H.R. パッチ (1927) の見解を支持することで一件落着となるだろう。ネット検索³²からの情報であれば、オランダの絵画(1530年頃)で確認できる。他方、②の意味であれば、百田氏は「球」を運命の女神が移動する際に用いた乗り物と考えていたことになる。こうなると、課題には(i)ローマ神話のフォルトゥナと球、(ii)乗り物としての球という二つの解決が求められる。調査内容は理解できても、古代ローマ美術の専門家でなければ、証明するのは容易ではない。約30年間、中世文学及び中世ヨーロッパ写本を中心に運命の女神研究をやってきた私が見出した解決の糸口は、F.P. ピカリング(1970)³³の図書にある図解にあった。これはフォルトゥナ・レデュックス(Fortuna Redux; 帰還の安全を司る運命)を描いた Nicoletto da Modena による版画(北イタリア・1500頃)である【図1】。フォルトゥナは海上で右足を球の上に置き、左足を櫂の柄の部分に置いている。また、彼女の右手に巻き付けられ股に挟まれた帆は風を受けて膨らんでいる。フォルトゥナ・レデュックスは、J.B. カーター(1900)が集めた41の崇拜の名称(呼び名)の1つであるため、ローマ神話のフォルトゥナであることは間違いない。そのフォルトゥナが左足で球に立っている。注目すべきは、風で膨らんだ帆と櫂の操作によって、海に浮かんだ球は移動できることにある。つまり、球は「乗り物」として機能していると言える。課題2の証明は「乗る」が①の意味であれば H.R. パッチの見解で、②の意味であれば Nicoletto da Modena の版画的例示で事足りると思う。

4.3 「人の運命が見える」とはどういうことか

用例(4)に「人の運命が見える」とある。この文は不十分で、英語構文の観点から言えば、「見える」の主語と媒介・手段を表す前置詞を用いた句が省略されている。正確に言えば、「フォルトゥナは瞳を通して人の運命が見える」となるだろう。こうなると、フォルトゥナには目があることになるが、ラテン文学では彼女は「目が見えない」(= blind) ことになっている。その証拠は彼女の描写に用いられた ‘caeca’ という語³⁴から見出せる。アプレイウス(Apuleius)の『黄金のロバ』から興味深い一節を引用するが、これがこの課題を解決する糸口となるだろう。

31 Patch (1927), p.148 “The figure of Fortune standing on a sphere was known in the art of ancient Rome.”; cf. 『中世文学における運命の女神』, p.124.

32 <https://en.wikipedia.org/wiki/Fortuna> (2022年8月26日閲覧)。

33 F.P. Pickering, *Literature and Art in the Middle Ages* (Florida, 1970), plate 5a.

34 例えば、Ammianus Marcellinus, XXXI. 8.8; Statius, *Silvae*, II. vi. 8-9; Pacuvius, *Unassigned Fragments*, 37 & 41; Apuleius, *The Golden Ass*, VIII. 24. 2-5; Seneca, *Phoenissae*, 631-632; Seneca, *Hippolytus*, 978-980; St. Augustine, *De Civitate Dei Contra Paganos*, IV. xviii; Pliny, *Natural History*, II.v.22 を参照。

(24) subiitque me non de nihilo veteris priscacaeque
doctrinae viros finxisse ac pronuntiasse
caecam et prorsus exoculatam esse Fortunam,
quae semper suas opes ad malos et indignos
conferat,... (Apuleius, *The Golden Ass*, VII. 2. 18-22)³⁵

その時、私は古代の作家らのフォルトゥナに対する考えを思い出す機会が少なからずありました。フォルトゥナは目が見えませんでした。なぜならば、彼女はいつも自らの富を悪人や愚か者に分け与えていたからでした。

(24) ではフォルトゥナは「目が見えない」ということだけでなく、彼女の本性も描かれている。彼女の本性とは、目が見えないから、自らの豪華な持ち物（世俗物資）を値しない者たちに無作為に分配することである。彼女の行為自体が非難されることもあったが³⁶、それこそがフォルトゥナの特性で、中世文学まで脈々と受け継がれている。

ラテン文学のほかに、『ブリタニカ国際大百科事典』（TBS ブリタニカ、1974年）³⁷に頼ると、古代ローマのフォルトゥナは、「目が見えない」ということを示すために、布で目隠しされていた。基本的には、フォルトゥナは「目が見えない」ように目隠しをされていたが、絵画においては画家の自由裁量によって目が描かれることもあったようだ。Nicoletto da Modena による版画に描かれたフォルトゥナ・レデュッスとその一例となる。

上記の解説は「人の運命が見える」という百田氏の表現に対して私が疑問を抱いたことに端を発したものである。説明が多少くどくなってしまったかもしれない。一般的にはフォルトゥナは「目が見えない」とされていたが、時には彼女に目があったことは絵画から理解できるだろう。しかしながら、フォルトゥナは目が見えても、「瞳」を通して「人の運命」を見るという行為はしなかった。彼女の本性ではないからだ。では、百田氏はどうして「人の運命が見える」という文言にしたのだろうか。

ローマ神話のなかで運命を司る女神と言えば、通常フォルトゥナ(Fortuna)が想起されるが、彼女のほかに別の女神がいた。パルカ(Parca)である。ただし、パルカは単数形なので、ギリシア神話のモイライ(Moirai)に対応して複数形のパルカイ(Parcae)で知られている。ギリシア神話のモイライ、あるいはモイラたちは運命の3女神(the Fates)を指す。具体的に言えば、人間の誕生を司って生命の糸を紡ぐクロト(Clotho)、人間の一生の長さや運命を決定するラケシス(Lachesis)、運命の糸を切るアトロポス(Atropos)である。このことを考慮すれば、「人間の運命が見える」という表現は、百田氏がローマ神話のパルカ、ギリシア神話で言えば、モイライのラケシスの特性とフォルトゥナの特性を混同してしまったことから生じたのではないだろうか。課題3は百田氏の思い違いによる産物という結論で了したい。

35 引用は Loeb Classical Library 版に基づく。以下、本文中及び脚注のラテン文学の引用はすべて Loeb 版による。イタリック体は筆者。以下同じ。

36 例えば、中野定雄訳『プリニウスの博物誌』第1巻(雄山閣、1986年)、II. 5.22 参照。

37 「古代ローマの運命の女神、別名をフォルスともいう。ギリシアのテュケと同一視され、目隠しをし、手に豊穡の角と運命をあやつる舵を持った姿で表わされた。」(p.600)。

4.4 車輪の進行は大きく変化するとはどういうことか

「運命の車輪」とは一体何なのか。この説明のために、ティブルス(Tibullus)とアミアヌス・マルケリヌス(Ammianus Marcellinus)のラテン文学に着目した。

(25) *versatur celeri Fors levis orbe rotae.* (Tibullus, I.v.70)

気まぐれなフォルトゥナは軽やかに車輪を回します。

(26) *Inter haec Fortunae volucris rota, adversa*

prosperis semper alternans, (Ammianus Marcellinus, XXXI. 1)

同時に、運命の車輪は速やかに回転し、いつも幸運と悪運を交互にもたらしめます。

「車輪」を表す語‘*rota*’を用いたフォルトゥナの所業は、古くは抒情詩人ティブルスのような紀元前1世紀の作品にも見られる。(25)ではフォルトゥナがおそらく手を用いて車輪を回していると推測される。一方、(26)は4世紀の歴史家アミアヌス・マルケリヌスからの一節である。ここでは、車輪が回転するたびに人の運も変化することが示されている。つまり、運命の車輪と人の運との間には密接な結びつきがはっきりと見てとれる。このような運命の車輪と人の運の密接な結びつきは中世写本の彩飾画にも顕著に見られる。例えば、4つの人物の像が縁に配された運命の車輪の基本構図³⁸のほかに、遠心力が適用された運命の車輪³⁹、機械仕掛けの運命の車輪⁴⁰、組み合わせ車輪⁴¹などである。

文学であれ美術であれ、運命の女神自身が手で「運命の車輪」を回転させると人の運が変動するというテーマは、H.R.パッチの言う「古典的寓意」にも「中世的寓意」にも見られた。このほか、パッチはこれらの範疇では説明できない車輪の中世的観念があると指摘している。それは車輪の進路の変更という描写である。

(27) For example, the wheel is sometimes figured as having a course on which it turns. Perhaps this means only that it goes “round and round”; but when we read of its changing this course we must understand either that it goes backwards or that it travels on a special road and selects a new path.⁴²

たとえば、車輪には回る進路があるように描かれる場合があります。ことによると、これは単に車輪が「ぐるぐる」回ることを意味するだけかもしれませんが。しかし、車輪に進路の変更があり得るとなると、車輪が後退するか、特定の進路を進んで新たな道を選んだりするかのどちらかを考えなければなりません⁴³。

38 cf. London, The Muniment Room & Library, Westminster Abbey MS. 22, folio 66^{vo}; London, The British Library MS. Add. 42133, folio 42^{ro}. 轟 (2000), Fig. 126 & Fig. 56 を参照。車輪上にいる4つの人像は、頂点から時計回りにレグノー(regno)→レグナーウィ(regnavi)→スム・シネ・レグノー(sum sine regno)→レグナーボ(regnabo)を表している。regnoは‘I reign’を、regnaviはregnoの直接法完了形で‘I have reigned’を、regnaboはregnoの直説法未来形で‘I will reign’を意味する。

39 cf. Manchester, John Rylands Library, MS. English 1; New York, Morgan Library & Museum, MS M. 876, folio 6. 黒瀬『中世ヨーロッパ写本における運命の女神図像集』(三省堂, 1977年), Plate 122 & Plate 123.

40 cf. Paris, Bibl. nationale de France, MS Fr. 1586, folio 30^{ro}. 黒瀬(1977), Pl. 137 を参照。

41 cf. Paris, Bibl. nationale MS Fr. 1584, folio 297; New York, Morgan Library & Museum, MS M. 396, folio 175. 黒瀬(1977), Pl. 138 & Pl. 139 を参照。

42 H.R. Patch (1927), p.169.

43 『中世文学における運命の女神』, p.147 を参照。

こうなると、車輪は旅行用の車、即ち乗り物になっているという考え方になる⁴⁴。百田氏の胸のうちにあったのはローマ神話に出てくる「フォルトゥナ」だったが、百田氏が用いた「車輪の進行は大きく変化する」という表現は「運命の車輪」の古典的観念の範疇では理解できない。それはかなり特殊な中世的観念に基づくものであった。「運命の車輪」が乗り物になっているという考え方であれば、少しの「力」を加えて進路を変えるという発想もあり得るだろう。課題4はH.R. パッチの指摘で何とか証明できる。

4.5 行く手に「死」が待っている動く車輪とはどういうことか

全般的に見て『フォルトゥナの瞳』には「死の運命」、「死」の運命、死の運命という文言⁴⁵に関連して死神⁴⁶がしきりに顔を出す。例えば、次のとおりである。

- (28) 「死の運命」が定まっている誰かの命を救うということは、死神の仕事の邪魔をしているのかもしれない。(p.284)

そうなると、「行く手に「死」が待っている」という表現は「死の運命」を暗示し、車輪が時として「死」に関与しているのではないかと私たちに推測させる。また、「動く車輪」という表現は、回転する車輪もしくは移動する車輪であることを私たちに連想させる。

では、回転する車輪の場合はどうか。ジョン・リドゲイトの中世文学に着目した。

- (29) For deth ne sparith emperour ne kyng,

Though they be armed in plates made of steele:

He castith downe princes from Fortunes wheele,

As hir spokes rounde about[e] goo,

To ememplifye, who that markith wele,

How this world is a thurghfare ful of woo. (Lydgate, 'A Thoroughfare of Woe' 130-135)⁴⁷

というのは、死神は皇帝も王も容赦しないからです。

たとえ彼らが鋼鉄製の鎧で武装していてもです。

死神は運命の車輪から王侯らを投げ落します、
車輪の輻がぐると回るときにです。

これは十分に気をつける者に例示するためです、
如何にこの世は悲痛に満ちた大通りであるかを。

ここでは死神が運命の車輪から王侯らを投げ落として彼らを「死」へと導いている。これは車輪の中世的寓意である。このような寓意のモチーフは中世の美術にも見られる。Härkeberga 教会(スウェーデン)の壁に描かれたフレスコ画(15世紀)には死神が運命の車

44 黒瀬(1977), Pl.71 & Pl.72 を参照。Biblioteca Apostolica Vaticana MS Pal. Lat. 1066, folio 239 については、<http://www.mss.vatlib.it/gui/scan/link.jsp> を参照(2022年8月26日閲覧)。

45 「死の運命」については、p.68, p.284, p.290, p.413, p.418, p.419, p.421(2回), p.432, p.457 を参照。「死」の運命については、p.111, p.148, p.236 を参照。死の運命については、p.189, p.261, p.445 を参照。

46 死神については、p.55, p.103(2回), p.192, p.283(2回), p.284(3回), p.285(2回), p.348, p.388(2回), p.456, p.461 を参照。「死神」については、p.157(2回), p.388(2回), p.419 を参照。

47 *The Minor Poems of John Lydgate, Part II* (EETS, 1934), OS 192, p.826.

輪から人を引きずり降ろそうとする場面がある。運命の女神は不在であるが、車輪が「運命の車輪」だと断定できるのは、車輪上に配された4つの人物の像の近くに頂点の regno (レグノー)から時計回りに regnavi(レグナーウイ), sum sine regno(スム・シネ・レグノー), regnabo(レグナーボ)と記された小さな巻物が見られるからである⁴⁸【図2】。運命の女神と死神の協働は、行く手に「死」が待っている動く車輪のイメージを私たちに与えてくれる。

では、移動する車輪の場合はどうか。4.4で述べたように、車輪の「移動」を表すモチーフは特殊な中世的観念なので、文学の用例を見出すことは難しかった。だが、美術において興味深いデッサン(素描)を見つけた。ジャン・クザン(Jean Cousin)の『運命の書』⁴⁹のなかに運命の女神と死神が相手を見つめて平原を「旅」する光景が描かれていた【図3】。運命の女神は死神の右腕に左手を添え、死神は右手で車輪を転がして移動している。注目すべきは、このデッサンの上にラテン語で書かれた‘VLTIMA FORTUNA’という見出し(heading)である。ラテン語の意味は「最後の運命」となる。そうなると、デッサンは「死の運命」を暗示し、運命の女神と死神の協働は、行く手に「死」が待っている動く車輪のイメージを私たちに与えてくれる。課題5は、「動く車輪」が回転する車輪であろうと移動する車輪であろうと、リドゲイトの中世文学と Härkeberga 教会のフレスコ画やジャン・クザンのデッサンのような中世の美術で証明できる。

4.6「幸運の女神」及び「チャンスの神様」は運命の女神とどのような関係か

(a) 運命の女神と「幸運の女神」

運命の女神は人に微笑んで右手で豪華な物を与えたかと思うと、顔をしかめて左手でそれを取り戻す行為をする。彼女には幸運を授ける力と悪運をもたらす力が備わっているからだ。「運命の二面性」という言葉が用いられる所以はここにある。「二面性」は英語で言うと、‘two-facedness’または‘two-sidedness’である。これは、彩飾画では2つの顔⁵⁰を持つあるいは右半分が白色で左半分が黒色の姿⁵¹からなる身体的特徴で表現された。このような特徴は「幸運の女神」にはない。では、どうすれば運命の女神と「幸運の女神」の関係を示せるだろうか。私は中世の英詩人ジョン・リドゲイトの『王侯の没落』第3巻⁵²に描かれた運命の女神(Fortune)と貧乏女神(Glad Pouert)の争いの物語に解決の糸口を見出した。ここでは運命の女神と貧乏女神が条件付きで争い、貧乏女神が勝利すると、運命の女神から‘Onhappi Auenture’(悪運)の力を奪うため、‘Euel Auenture’を杭に縛らせる(III.628-629)⁵³。こうなると運命の女神は本来の運命の女神ではなくなる。さもなくば「幸運の女神」と呼ぶしかないだろう。

48 巻物については、轟(2000), Figs. 27, 97, 101 & 155 または黒瀬(1977), Plate 85 を参照。

49 Jean Cousin, *The Book of Fortune* (Bibliothèque internationale de l'art, 1883), Plate CXCIX. これはフランス学士院図書館に所蔵された写本から再現された200点の未発表デッサンの1枚である。

50 例えば、Paris, BnF MS Fr. 809, folio 40; London, BN MS Add. 35321, folio 180; Paris, BnF MS Fr. 24307, folio 35^{vo}; Oxford, Balliol College MS 238 E, folio 123 を参照 [黒瀬(1977), Plates 1, 3 & 5; 轟(2000), Fig. 28]。

51 例えば、Berlin, Staatsbibliothek, Preußischer Kulturbesitz MS lat. fol. 25, folio 107; Paris, BnF MS Lat. 6643, folio 76; Jena, Universitätsbibliothek MS M. Gallica f. 87, folio 309 を参照 [轟(2000), Figs. 41, 52 & 118]。

52 Henry Bergen (ed.), *Lydgate's Fall of Princes Part II* (E.E.T.S., E.S. 122, 1924; rptd 1967)。

53 例えば、Glasgow, University Library MS Hunter 371, folio 69^{vo}; London, BL MS Royal 18 D VII, folio 52 を参照 [轟(2000), Figs. 9 & 11]。

辞書に頼る方法もある。『新和英大辞典』（第5版）で「幸運の女神」を調べると、そこには '(the Goddess of) Fortune' と記され、次のような4例が示されている。

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| ①幸運の女神が彼にほほえんだ。 | Fortune smiled on him. |
| ②われわれには幸運の女神がついている | Luck is with us. |
| ③幸運の女神に見放されてしまった | I ran out of luck. |
| ④幸運の女神は勇者に味方する | Fortune favors the brave. |

①と④については、『リーダーズ英和辞典』（第3版）の Fortune の第1定義にも同じような用例が見られる。現代では「幸運の女神」と運命の女神は同義語(synonym)として扱われているようだ。

(b) 運命の女神と「チャンスの神様」

私は H.R. パッチ (1927) の見解に解決の糸口を見出した。パッチは「キリスト教期以前において、フォルトゥナは機運 (the goddess of chance) と決して同じものではなかったが、ローマ帝国において既にフォルトゥナは機運の女神として絶大な権力を誇っていた」⁵⁴ と指摘する。これは異教神フォルトゥナが機運の女神として無秩序に活動していたことを示す。ラテン文学からセネカ『ヒュポリュトウス』の一節を挙げればその裏付となるだろう。

(30) Res humanes ordine nullo

Fortuna regit sparsitque manu
munera caeca, peiora fovens. (*Hippolytus*, 978-980)

運命の女神は人の世を無秩序に支配し、盲目な手で自らの贈り物をまき散らし、悪しき者たちに目を掛けています。

フォルトゥナと機運の女神の関係は16世紀から17世紀のエンブレム集(寓意画)からも一目瞭然となる。ジェフリー・ホイットニー (Geoffrey Whitney) の *A Choice of Emblemes* (1586) には機会神 (Occasio)⁵⁵、俗に言う「チャンスの神様」が見られる。彼女は右手に剃刀を持ち、両足元に翼を付け、波間に浮かぶ車輪上に立っている。注目すべき点は後頭部が禿げて長い前髪が風になびいていることである【図4】。G. ウィザーの *A Collection of Emblemes* (1635) にも同じような構図で、後頭部が禿げ長い前髪が風になびいた機会神が見られる【図5a】。一方、ウィザー(1635)には左手に三日月を持ち、翼のある球に乗った運命の女神も見られるが、彼女の後頭部は禿げて長い前髪が風になびいている【図5b】。運命の女神と機会神の前髪の共通性はこの時期に双方の混同が生じていた表れである。だから、図像の下に書かれた説明文を読まなければ、私たちは見た目から双方は同じ存在だと錯覚してしまうことになる。

以上、運命の女神はリドゲイトの物語から「幸運の女神」と呼ばれる可能性を示した。また辞書の例から現代では「幸運の女神」と同じ存在とみなされていることを示した。「チャンスの神様」は H.R. パッチの見解とエンブレム集から運命の女神との混同が認められ、時折同一視される関係性にあったことを示した。これが課題6に対する答えである。

54 H.R. Patch (1927), pp. 10-12.

55 ラテン語の occasio は女性名詞で、英語の opportunity という意味である。

5 結語

「運命の女神」という文言が日本文学のなかに見られるなんて全く思っていなかった。映画『フォルトゥナの瞳』のパンフレットを見なかったならば、また大学病院に入院したときに百田氏の『永遠の0』(2006年、作家デビュー作品)を読まなかったならば、中世英文学を専門とする私はこのような論文を書くことはなかっただろう。百田氏の小説『フォルトゥナの瞳』(2014年)に見られた「ローマ神話に出てくる球に乗った運命の女神だ。人間の運命が見える」という表現から3つの課題—①ローマ神話に出る運命の女神、②球に乗った運命の女神、③人間の運命が見える運命の女神—を想定できた。さらに、運命の車輪に関する「行く手に「死」が待っている動く車輪」と「車輪の進行は大きく変化する」という表現から風変わりな運命の車輪の課題を想定できた。課題のなかで「乗った」という表現は『広辞苑』で意味を確認しなかったならば、西洋文学を研究する私には理解など及ばなかった。「人間の運命が見える」という表現は難解だった。運命の女神の本性にはないからだ。また、車輪の課題も難題だった。通例の古典的寓意と中世的寓意では解決できないものだったからだ。H.R. パッチ(1927)の図書がなかったならば、私の力量では解決には至らなかった。

百田氏は『フォルトゥナの瞳』以外の数々の小説のなかにも「運命の女神」を含めた表現を用いてその時の状況説明を試みていた。時系列に作品を並べてみると、百田氏が作家デビュー当初から運命の女神の存在をずっと心に留めていたことが分かった。本当に百田氏は「運命の女神」をこよなく愛した作家だったと言えるかもしれない。興味深かったのは、「運命の女神」の文言に類似した「幸運の女神」と「チャンスの神様」がある時期の作品に用いられていたことだ。これらの関係性についても辞典及びエンブレム集に頼ることで何らかの答えを導き出すことができた。

百田氏の小説については、『フォルトゥナの瞳』及びそれ以前に出版された作品を研究の対象とした。百田氏は当初からの「運命の女神」への思いを『フォルトゥナの瞳』で開花させたのではないかとこの前提で論を展開したからだ。この前提はある程度証明できたと思っている。しかしながら、これをもう少し完璧なものにするには、『フォルトゥナの瞳』以後の作品—『カエルの楽園』(2016年；新潮文庫, 2017年), 『幻庵』(上)(中)(下)(2016年；文春文庫, 2020年), 『夏の騎士』(2019年；新潮文庫, 2021年), 『野良犬の値段』(上)

(下)(2020年；幻冬舎文庫, 2022年)—を読んで「運命の女神」という文言の有無を確かめることも必要だろう⁵⁶。

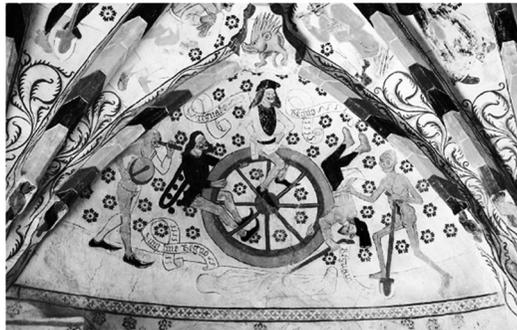
56 『フォルトゥナの瞳』以後の4作品については、文庫本を利用して読んだ。結論から言えば、「運命の女神」という文言を見つけることはできなかったが、『夏の騎士』のなかで「幸運の女神」という文言を1例(p.207)だけ見つけた。

図1 Fortuna redux



(出典：F.P. Pickering, *Literature and Art in the Middle Ages*, Plate 5a)

図2 Härkeberga 教会の壁に描かれた15世紀のフレスコ画の一部



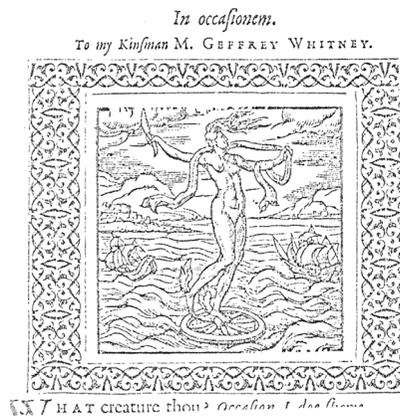
(出典：約35年前、私が大学院生るとき、スウェーデンに行かれた先輩から貰った絵ハガキによる)

図3



(出典：Jean Cousin, *The Book of Fortune*, Plate CXCIX.)

図4



(出典：Geoffrey Whitney, *A Choice of Emblemes*, p. 181)

図 5 a



図 5 b



(出典 : George Wither, *A Collection of Emblemes*, Bk. 1, Illustr. IV & Bk 3, Illustr. XL)

資料 1

(a) discite nunc, quare Fortunae tura Virili

detis eo, calida qui locus umet aqua.

accipit ille locus posito velamine cunctas

et vitium nudi corporis omne videt;

ut tegat hoc celetque viros, *Fortuna Virilis*

paraestat et hoc parvo ture rogata facit. (Ovid, *Fasti*, IV.145-150)

湯気の立つ場所で、何故フォルトゥナ・ウィリリスに香を焚くか、さあ、心に留めてください。女性たちはその場所に入ると、裸になります。だから身体のシミは丸見えです。フォルトゥナ・ウィリリスは男性たちの目からそれを隠してくれます。

(b) qui dicit “quondam sacrata est colle Quirini

hac *Fortuna die Publica*,” verus erit. (Ovid, *Fasti*, IV.375-376)

「かつてこの日、フォルトゥナ・プブリカの神殿がクウィリナリスの丘に献堂された」と言う人は真実を語ることでしょう。

(c) Tantum sane huic velut numini tribuunt, quam Fortunam vocant, ut simulacrum eius, quod a matronis dedicatum est et appellata est *Fortuna muliebris*, etiam locutum esse memoriae commendaverint atque dixisse non semel, sed iterum, quod eam rite matronae dedicaverint.

(St. Augustine, *De Civitate Dei Contra Paganos*, IV.xix)

確かに、人々はフォルトゥナと呼ぶこの想像上の神に名誉があると考えるほどで、ローマの婦人たちによって奉献された偶像フォルトゥナ・ムリエブリスが本当に口を開き、ローマの婦人たちが奉献の儀を行ってくれたと何度も宣言した話を心に留めています。

